



フランスから見た日本映画: 映画館から フランス人の居間まで

国際コミュニケーション学部
ピータース・コランタン



1897年、リュミエール兄弟の最初のカメラマンであったガブリエル・ヴェイユが日本から映像を持ち帰って以来、日本映画はフランスの映画ファンや映画人たちを魅了してやまない。本稿では、フランスにおける日本映画の発展の歴史を簡単に振り返る。

日本映画は、世界で最も古く、その生産性（今日でも、日本は興行収入世界第3位）だけでなく、何よりもその質の高さにおいて、世界で最も重要な映画産業のひとつである。このことは、世界中の権威ある映画祭で受賞した数々の賞が証明している。カンヌ国際映画祭で4つのパルムドールとグランプリを受賞した日本は、フランスでも特に認知され、高く評価されている。私たちは、その代表例として、黒澤明監督の映画『羅生門』（1950年）を挙げることが多いが、フランスで初めて日本映画が上映されたのは更に数十年前に遡らなければならない。

1929年、衣笠貞之助監督は、『十字路』（1928年）を海外で上映するため、2年間の旅に出た。彼はまずソビエト連邦を訪れ、次にドイツを経てフランスに渡った。そこで衣笠はプロデューサーのアンリ・ディアマン＝ベルジェと出会い、

『十字路』はすぐにパリで上映されることになった。これがフランスでの日本長編映画の初上映であり、ヴェネツィア国際映画祭で『羅生門』が上映される22年前に、すでにフランスで日本映画への本格的な関心が高まっていたということになる。

その後、フランス在住で、記者、作家、翻訳家であった松尾邦之助は、この上映に刺激され、溝口健二監督にフランスでの映画上映を依頼しようと日本を訪れた。溝口監督は日活撮影所を説得し、彼の作品『狂恋の女師匠』（1925年）をフランスで上映することに成功した。日本映画はフランスで非常に注目され、1929年10月には当時の人気映画雑誌『シネモンド』の表紙を女優の徳川良子が飾った。

戦後、フランスで再び日本映画が見られるようになったのは、1951年、ヴェネツィア国際映画祭で『羅生門』が受賞してからである。これをきっかけに、フランスは時代の流れに乗り、カンヌ国際映画祭に日本映画を出品することになった。1952年に吉村公三郎監督の『源氏物語』（1951年）が撮影賞を受賞して以降、日本映画はカンヌ映画祭で数々の賞を獲得し、フランス人の目は、衣装、セット、照明を通して日本映画のエキゾチズムに注がれた。

フランスにおける日本映画への関心が確認された後、パテ社は日本映画を活用するためにパテ・オーバーシーズという子会社を設立し、大映撮影所と最初の契約を結んだ。1954年、大映は衣笠貞之助監督の『地獄門』（1954年）を発表。審査委員長ジャン・コクトーの強い影響力のもと、映画祭の審査員はこの作品をグラン

リ（現在のパルムドールに相当）に選出した。

『地獄門』のフランス版ポスター

パテ社は、『地獄門』を映画館で上映する際に、全編フランス語で吹き替えることにした。1952年に公開された『羅生門』よりも多くの人に観てもらうためだった。この決断が功を奏し、映画は大成功を収め、フランスで100万枚以上のチケットが売れた。これは1954年にフランスで公開された日本映画としてはかなり多い部類に入る。ちなみに、1952年の『羅生門』のチケット販売枚数は24万枚だった。

1956年、パテは島耕二監督の『幻の馬』（1955年）で子供向け映画のニッチを攻撃することで、日本映画を別の方法で利用しようとした。続いて、日本映画の配給を多様化しようとする動きが始まった。パテ・オーバーシーズは仁侠映画を優先し、日活に接近した。ジャンル映画も登場し始め、特に怪獣映画はフランスにおける大衆映画の最初の本格的な成功作となった。

この成功はテレビに引き継がれ、フランス人は日本発の映像から目を離すことができなくなった。子供向け番組『Récré A2』や『Club Dorothee』の司会者で、ドロテとして知られるフレデリック・ホシェデは、『UFOロボ グレン

ダイザー』、『らんま ½』、『美少女戦士セーラームーン』、『聖闘士星矢』、『ドラゴンボール』といった日本のアニメ番組を数多く放送し、フランスにおける日本アニメへの本格的な熱狂が始まった。このブームは2000年代初頭のスタジオジブリの映画以降、現在も続いており、フランスのマンガ市場に大きな影響を与えている。2022年、フランスで最も売れた100冊の本のうち、4分の1がマンガだった。また、フランスのマンガ市場は日本に次いで世界第2位の規模でもある。

1920年代末には視覚的好奇心の対象でしかなかった日本映画は、フランスにおいて、まずは、黒澤・溝口・小津監督トリオのような偉大な作家たちを通して映画ファンの間で、また、今日ファンが増え続けているアニメーションを通してより多くの人々の間で、徐々にその地位を確立してきた。

『UFOロボ グレンダイザー』のフランス版ポスター